

論説

田舎回帰解読覚書

蕭 紅 燕

自然復帰と田園生活への憧憬

近年日本の本屋さんでは、農業本や田舎暮らしのノウハウ関連本が平積みと
なって売行きがよく、静かな農業ブームのようだ。農業新聞などもしょっちゅ
う新規就農関連記事が紹介され、巷では農業や田舎暮らしにかなり熱い視線を
向けており、半農半X的暮らしを实践する都会人も少なくない。また、東日
本大震災以来、それまでの生活に疑問を持ち、思いきって田舎へ移住し、新規
就農や農的な暮らしに方向転換する動きも目立つ。

実際、友人知人たちの中にも、半農半コンサルタント、半農半植物研究、半
農半職人(陶工、布作家、大工や家具づくり、機織り、パン屋、製塩などの職人)、
半農半アート、半農半店主(喫茶店、カフェ、食堂、レストラン、農宿、宿屋
経営など)、半農半釣人などと、枚挙に暇がないほど多種多彩の、その人にぴっ
たり合ったあらゆる組み合わせが考えられる。こうした暮らし方や価値観の共
通項はといえば、自力救済、自給自足ではないだろうか？

わたしも微力ながらも、土佐地域文化叢書編集はじめ、現地調査、ゼミや卒
論作成などのお手伝いを通して、学生や若者たちの自給自足的な生活への強い
関心を常に体感している。

近年、地域活性化、グリーンツーリズム、最近はさらに田舎暮らしやアグリ
ツーリズム、田舎ビジネス、空き家政策関連テーマを卒論に取り上げたものが
数多くみられる。今年の卒論発表会でわたしの割り当てられた会場だけでも、

そうした田舎暮らし関連テーマの発表が7, 8本あった。卒業後、県内製塩職人のところへ弟子入りする予定者もいる。その塩づくりのお師匠さんも都会からの移住者。また、長年田舎暮らしや農村の生業と家族の変遷を追いかけてきたわがゼミからもこの春、ついに孫ターンが初誕生。卒業後、母方の祖父母を手伝いながら、さらに2年間、農業の専門的な勉強をする予定という。孫ターンも一種のUターンであり、首都圏近郊農村での新規就農だが、就農支援補助も受けられるから自立までにはとりわけ経済的な不安は少ない。

時間の制約で今回は長い原稿を綴る余裕がなく、ひとまず気になる新聞記事から興味深い記事を二三取り上げよう。

2年前に移住希望地高知県6位

一昨年の高知新聞には次のような興味深い記事がある。「移住希望地本県6位——東京のNPO調査「高知屋」PR奏功——」（2014年2月10日付）。

関東在住者を中心に20～70代の1642人から回答を得た結果、移住希望先の都道府県で、高知は6位に入った。しかし、2008～11年の4年間、高知はずっと21位以下。12年は順位を大きく上げたものの、12位だった。1位は長野、2位山梨。両県とも首都圏からの距離の近さに加え、定期的な移住セミナーの開催や支援センターの常設が人気を後押ししているという。

なぜ長野と山梨が都会人にとって魅力的なのか？私見によれば、両県への熱い眼差しは、昨今はもとより、いずれも1970年代にはじまる故郷回帰ブームよりずっと以前から、首都圏在住の富裕層や作家たちにとって人気の別荘地であったという側面も見逃せない。田舎暮らしに厭きたり、また疲れを感じたりすると、いつでも気軽に都会へ引き上げられるし、いまの言葉でいう「二地域居住」「二段階移住」もさほど無理はない。

都会っ子たちにとって、慣れ親しんだ便利な都市部から離れ、長年培われてきた生活基盤を全部投げ捨ててまで、いきなり片田舎の農村部、それも縁もゆかりもないムラにやってきて、腰を下ろしてじっくりゆっくり暮らすには、それなりの覚悟と苦勞と厳しい試練が待ち受けているのだ。

3位以下から10位までは岡山、福島、熊本、高知、富山、群馬、香川、鹿児島。四国では、香川が9位、愛媛、徳島は21位以下。

そして、高知の人気上昇について、「豊かな自然や美味しい食べ物、趣味で釣りができるなど、具体的な田舎暮らしを提案しており、理想的な田舎暮らしをイメージできたからでは」とのこと。

この記事を読んで、実際、ムラ住まいの筆者は想わず同じ田舎在住の友人と顔見合せて苦笑した。傍目には「高知は人との距離が近く、^{フレンドリー}友好的」にみえるかもしれない。しかし、^{たま}偶に遊びに来る場合と定住とは、本人たちも村人たちも心構えが全然異なることを知らなければ、安易な移住は困惑と相互迷惑が起きることも少なくない。

これも推測だが、香川への移住希望はおそらく関西方面との近距離によるところが大きい。高知の場合は、四国山脈にも遮られ、ある意味では文化の吹き溜まり的な地理環境にあって、四国他3県同様の21位以下が本来の“あるべき姿”ではないだろうか？ そんな高知県への希望者急上昇はマスコミなどの影響が絶大であり、県挙げての「高知家」宣伝効果とアピール、県下各市町村が後押ししていることが決定的な要因となったようだ。実際、受け容れる側のムラ人たちにとって、物心両面の準備ができていないし、彼らの意識には、さほど変化が見られていない気がする。

確かに農村部には人口減少が止まらず、いろいろ不便不都合な事態もあるだろうが、だからといって、どこの馬の骨か分からない者が自分たちのムラに移り住でくることへの抵抗が村人に強く感じられる一方、お上から、役場から言われて進められている移住促進政策だけあって、それなりに対応を迫られているのも事実のようだ。しかし、外来者の移住が果たしてどれだけ成功しているか？ それは短期間に現れた数字ではなく、3年、5年、10年、20年、30年、さらに移住者1世だけでなく、2世というふうに長いスパンで世代を超えてじっくり追跡しなければ、移住者受入れ状況を的確に把握しきれないことが現地調査で明らかになった。

事実、農村部に住みながら長年郷土史研究にも励まれる地元出身者の友人知人の多くは、近年の移住をあまり楽観視していない。「田舎でがんばっておら

れる人達は、それぞれ苦勞しています。それをよく理解しなければなりません。成功者は数千分の一、数万分の一に過ぎません。とくかく現実はきびしいというのが田舎暮らしです。直視しなければなりません。」というのが少し極論かもしれないが、典型的な見方でもある。別の郷土史家は移住の可能性は50分の一という。田舎への移住ブームに水をかけるような悲観論と捉えられるかもしれないが、これも「年寄の冷や水」として老婆心ながら、いずれもIターンの困難と試練を物語っている。

高知の5市町村は人口社会増

さらに、今年2月12日付高知新聞の社説では、昨年度、社会増を実現したのは、香南市のほか、安芸郡芸西村、北川村、高岡郡檮原町、幡多郡三原村の4町村。過去5年間で、転入者が転出者を上回る「社会増」を実現させたことが分かった。

地方はいま、死亡数が出生数より多い「自然減」と、転出者が転入者を上回る「社会減」の二重の人口減少に苦しんでいる。特に自然減は長年の少子高齢化の結果であり、生老病死は自然現象でもあるから、くい止めることはできない。

香南市は2010年に陸上自衛隊の連隊が移屯し、宅地開発によって高知市のベッドタウン化も進んでいるのが特徴だ。これに対して、4町村はいずれも平成の大合併では単独自立の道を選択した共通点がある。移住者の受け入れや、中学卒業までの医療費無料化など子育て支援に早くから努めてきた。檮原町は移住者用住宅のリフォームや檮原高校への海外留学支援も奏功したとみられる。単独での生き残りへ、人口対策も強い危機感を持って臨んできたことが伺える。

わたしが2月に実施した室戸・東洋町方面の調査で移住相談員に聞いた話だが、室戸や東洋町への近年の移住者の中には、子供の山村留学がきっかけとなった場合もあるという。

若者の田園志向派

また、同じ2月の日本農業新聞に面白い記事が目にとまった。2015年、NPO法人ふるさと回帰センターは15日、農山漁村に暮らしたいと希望する来訪者調査の結果を発表した。2015年の移住相談件数が08年の調査開始以来、初めて2万を突破。2万1584件と14年（1万2430件）に比べて7割も増えた。特に20代、30代の希望者が急増しており、全体の3分の2が20～40代を占めた。都市から農山漁村に価値を見出す若い世代の田園回帰現象が明確にみられる。

こうなると、移住者獲得は全国で争奪戦の様相を呈しており、受け入れには雇用や教育、医療の確保は必須条件ともいえる。人口が減少していく中で、公共サービスをどう維持していくかは大きな課題である。

田舎で自活する若者たちに乾杯！

このように近年、田舎への移住者、とりわけIターンが脚光を浴びるようになり、その活躍ぶりに目をみはるものがある。受け入れ先である農村部では、とりわけ若い人の移住を喜んでくれているようだ。

人口社会学では、世帯構成に変化をもたらす4要因として転入、転出、出生と死亡が考えられており、移住の場合はまさに転入そのもの。

移住類型として、わたしがまとめたのは次のとおり。1. IUJターン 2. 嫁ターンと婿ターン 3. 孫ターン 4. 県内移住 5. 外国籍の移住 6. 引っ越し感覚移住 7. 完全移住と渡り鳥的(季節的)移住 8. 学生の田舎体験インターンや休学生の一時的田舎暮らし 9. その他

近年の移住を把握するIUJターンも、巷ではすっかり定着している。Iターンの中にも、ざっくりいえば1. 縁故のない異郷人 2. 嫁ターン 3. 婿ターンがある。

なぜ嫁入り、婿入りという民俗語彙を用いないのか?! 横文字の多用に翹楚ひんしゆくしたくなる方もおられるだろう。長年民俗学の世界にも浸ってきたわたしが感じるには、婚家への嫁入りと婿入りや、漫画「サザエさん」のような妻方居住婚、

戦後増えつつあったマスオさん現象においてもイエのしがらみが強く、マイナスイメージが拭えない。そこで、婚姻を介在して移住してきた男女のことを嫁ターン、婿ターンという造語を使いたい。

Uターンには息子・娘ターンと孫ターンがある。孫ターンはつまり、1世代飛んで、祖父母か外祖父母の土地、家屋、農機具や農業技術及び人脈を受け継いだ場合である。

Jターンとは地方から大都市へ移住した者が、生まれ故郷の近くの規模の小さい地方都市圏、中規模な都市に戻り定住する還流現象。例えば、高知市長岡郡大豊町出身者が東京へ移住した後、高知市へ戻る場合。

出身県内での移動もあれば、農村部出身地から別の農村地帯への移住、つまり田舎から田舎へ移り住む場合もある。

わたしは97年高知へ赴任以来、農村の生業変遷とその担い手たちの動向を自分なりに追いかけて続けたが、振り返れば、土佐では数多くの異郷人移住者たちに出合った。高度成長期以来の日本が悩まされてきた公害問題を取り上げた有吉佐和子著『複合汚染』の刊行以来、若者の故郷回帰の静な社会風潮がみられ、高卒や大卒の若者たちが都市での生活に疑問を感じ、自分の可能性を見出そうとして農村への移住が始まった。

高知県ではわたしの限られた見聞だけでも、移住40年、30年、20年、10年など数多くの異郷人が地道に活躍している。彼らの中には、慣行農業1本立ての者もいれば、半農半X、または農的な暮らしの者もいて、実に多種多様で十人十色。“伝統”に束縛されぬ彼らは自分の手で住み家をつくり、移築したり、「気に入った場所に気に入った家をつくったり」。その人間関係も至って爽やかで気持ちが良い。補助金を充てにしない若者たちの^{てきとうふき}倜儻不羈な姿勢に胸を熱くする想いがする。彼らに共通しているのは「知足常楽」（足るを知る心があれば、常に楽しく気持ちも楽になれる）、「和而不同」（和して同ぜず）、そして労苦を^{いと}厭わずの3点が感じられる。多くの方々はすでにムラに深く根を下ろし逞しく適応し、先住民たちにとっても頼りになる中堅的な存在となっている。

最近、学生田舎体験も目立ち、休学して田舎暮らしを敢行する若者にも何人も出会った。投網漁や罟猟をし、捕獲した猪鹿の解体や皮鞣しをしたり、ジビ

エとして肉の加工販売を目指したり、様々な試みをする彼らは立派に自活しているためか、その眼がキラキラ輝いているのだ。

いつの世でも、若者は「朝8～9時頃の太陽のように」元気澁刺。時代を動かす牽引車、機関車的な存在。

「今の若いもんはなっとらん！」なんてものではない。真剣に自分自身を見つめ、農村生活を好奇心持って摸索しつつ青春謳歌している若者たちの良き友、理解者となりたい。そして、年長者として、彼らから心地良い刺激を受けつつも、静かに見守ってあげよう、というのが昨今の心境でもある。

中国の賢者、魯迅先生曰く「道は最初からそこにあるものではない。歩く人が増えると、ひとりでに道が出来上がってくるものだ。」

ところが、現代の日本農村には実に多様な生き方がみられる。ざっと分類してみると、1. 専業農家 2. 兼業農家 3. 半農半x 4. 農的な暮らし 5. 非農的な暮らし、などがある。

わたしは若いころ、大正時代に始まった武者小路實篤創立の新しき村にかなり関心があった。その新しき村は、去年、創設75周年を迎えた。反戦から始まった新しき村と、高度成長以来、1970年代以降の若者たちの故郷回帰、それに近年の田舎移住をとりまく内外の社会状況に相違があるものの、幾つかの共通点が認められよう。

1. Iターン者の多くは農村出身ではないため、農作業が初めてという場合がほとんど。言い換えれば、田園生活の理想に燃え、夢を持っている人々が多い。

2. 田舎暮らしだからこそ、ちゃんとした生業を営むことが必須であり、自らの経済的基盤を確立しなければならない。田舎でもできる仕事、職をもつことは先決だ。

3. 常に“^{うち}内”“^{そと}外”の壁に直面している。後来者として、いかに先住民たちと仲良く付き合い、溶け込んでいき、どうすればムラ人になれるか？つまり、田舎暮らしの困難を心身ともに乗り越えなくてはならない、という問題を抱えている。そして、ウチ、ソトの壁を超えて、いっそ新農人として地道に努力する方々も数多く現れている。

人間の暮らしには水、燃料（薪）、食物、照明などの基本的な条件が必要だが、

より環境にやさしいエネルギー調達に小水力発電という選択肢もある。そして、移住者のなかに、こういった持続可能なことに先住民を巻き込んで熱心に取り組む者が少なからずいて、有機農業や無農薬栽培を心掛ける希望者もたくさんみられる。

どこまで理想と現実との折り合いをつけ、自分たちの夢を貫けるかはわからない。しかし、このような知足的な暮らしを追い求めること自体は大正時代では水滴として極少数派が存在し、戦後次第に増えてゆき、せせらぎとして流れ出し、静かなブームとなり、そのうち奔流となる日が来るのではないだろうか？

わたしたちは地球ムラに棲んでいる以上、ヒトはじめ、すべての動植物との共生を念頭に置かなければ、人類もいずれは滅びてしまう。だからこそ、欲望という名の列車から飛び降りる勇気が大切だ。昨今のような田舎暮らしへの憧憬と試みは、實篤先生の新しき村の延長線上にある現象として捉え、そして世界平和を紡ぐものだと信じている。

筆者自身の移住と農業経験

自分の問題関心としては次のとおり。

1. 日本社会を理解するためにはムラを知ることは必須。ムラは日本社会の雛型であり原型である。

限界集落の地域再生を目指した先任大野晃先生とは別の視点から、疲弊した高知のムラを考えるためには、ムラ社会に関する蓄積の厚い多分野の先学たちに、腰を据えてじっくり学ぶ必要がある。

2. 諺に“不入虎穴焉得虎子”（虎穴に入らずんば、虎子を得ず）という。都会や街に住む者では到底体得し得ぬ村人の心理的機微、特徴を知るためには、自らそのムラに飛び込んで観察することも大事ではないだろうか。ムラに入らないと見えてこないものもたくさんある。一方ではムラ入りすれば、“鏡中看花”（鏡に映る花をみること）や机上の空論は避けられるかもしれないが、逆にムラの間人間関係にとらわれがちで、何も書けなくなる恐れも無きにしもあらず。

3. 昭和の“渡来人”のわたしも田舎暮らしに憧れており、失敗の連続で、素人にどこまでできるかは分からない。それでも、緑色天然（有機無農薬）の自給野菜と穀物をできる範囲に自分の手で育て、古人曰く“天人合一”的な暮らしの実現が理想的。

しかし、中国北京市出身の筆者はアジア系女性であり、欧米系でないため、田舎へ移り住む際、二重三重の意味での移住者、外来者、異郷人としての立場を意識させられる。また、沖繩那覇出身の家人にとっても同様であり、ヤマトンチュ的な慣習や考え方に違和感を覚える場面も少なくない。

移住経緯：

2000年頃、香北町永瀬に約1年間

その後、日高村加茂に約3か月？

さらに朝倉を中心に、車で約30分の通勤可能な距離内での家さがしを断続的に試したが、貸してもらえなかった。

2005年～2009年 旧朝倉村前田地区で畑つき古民家借りる

2008年～現在 ムラ在住

農業経験：

1999年から3年間、禰原神有居千枚田オーナーを経験

2009春～2014年春、佐川町永野の畑に通う

2010～2013年 隣村の茶畑を借りる

2014年～現在 隣村の水田を畑作に転作

2016年～現在 隣村の古民家を借りて修繕し休憩所にする予定

田舎回帰解読

——帰去来兮（帰りなん、いざ）「都市を辞して田舎で暮らす」——

さらに、次のような問題関心からこれまでなるべく文献資料にあたりつつ、現地調査を踏まえたうえで情報蒐集につとめ、田園回帰の流れを考察把握しようと考えている。昨年「田舎回帰解読」と銘打って地域社会学の授業として取り上げた際、学生たちの関心の高さにも驚き、また刺激的なご意見ご感想

コメントをたくさんいただいた。恥ずかしながらまだ備忘録程度に過ぎないが、田舎暮らしをめぐる問題として、自分の関心事を敢えて提示しておこう。

- ・大同社会（ユートピア，田園生活）への憧憬
武者小路実篤と新しき村
山岸会
その他
- ・伝統的な中国の隠士文化（隠遁生活）
- ・人類の歴史は移住の連続
- ・現代社会と田舎暮らし
本宅（田舎が本拠地）の場合
セカンドハウス
別荘の場合
二地域住宅
二段階移住
- ・日本における自然農法の元祖福岡正信とその影響
- ・経済発展，開発と環境問題
レイチェル・カーソン『沈黙の春』
有吉佐和子『複合汚染』
近年中国の公害や環境問題
- ・1990年後半にはじまる中国の「村官」（大卒者村リーダー）とその波及効果
- ・近年日本の地域協力隊と任期終了後の動向
- ・中国の「社区支持型農業」，有機無農薬，緑色野菜生産と有機野菜市場
- ・近年中国の田舎移住
現役世代Iターン
渡り鳥的な暮らしの高齢者や退職者Iターン
金持ち層・富裕層のIターン
帰郷者たち
その他
- ・近年中国農村への幹部「下郷」（農村体験と政策制定）と貧困地帯への支援

- ・中国農村の土地流転（田畑の有効利用）
- ・近年の地方創生と移住促進政策及び補助金対策
- ・現代農村にみる多様な生き方
 - 専業農家
 - 兼業農家
 - 半農半X
 - 農的な暮らし
 - 無農的暮らし
 - その他
- ・移住類型
 - IUJ ターン
 - 嫁ターン，婿ターン
 - 孫IUJ ターン
 - 田舎から田舎へ
 - 県内移住
 - 外国籍の移住
 - 引っ越し感覚移住
 - 完全移住と渡り鳥的（季節的）移住
 - 休学生の田舎体験インターンや一時的お試し田舎暮らし
 - 田舎暮らしツアその他
- ・地域協力隊，集落支援員
- ・田舎ビジネスや魅力発信の移住促進民間団体の活躍
- ・ハウス栽培と現代農業
 - 特化野菜のハウス栽培 胡瓜，トマト，ニラ，オクラ，園芸栽培花卉
 - 天敵を利用したハウス栽培
- ・有機農家と直販，ネット販売
- ・有機農法への誤解誤読
 - 有機＝美味で安全 有機野菜＝虫食い葉
 - 農家＝清貧で弱者 農業＝体力が必要 国産至上主義

- ・集落営農，農地集積と土地所有
- ・どうすればムラ人になれるか？——田舎暮らしの困難
- ・いっそ新農人を目指そう！——“ウチ”“ソト”の壁を超えて
- ・自給自足的暮らしと自然エネルギーの調達

水

燃料

食物

照明などエネルギー調達

- ・現金収入を得るのに漁師・猟師になるのが手っ取り早い？

猪鹿捕獲とジビエ利用

鮎，あめご

殺生と適正規模の狩猟，川漁，海漁を考える

- ・田舎でできる仕事，職を考える

自家菜園，自給野菜と穀物，物々交換

農業で生計を立てる場合

農業従事者になるためには

土佐備長炭，製塩など農業以外の仕事をつくる

土地，田畑，家屋の所有と有効利用

- ・山村の環境問題

鳥獣害対策

野生動物食物連鎖の頂点，狼を山に復帰させるべきでは？

狼が日本を救う

動植物との共生

移住，田舎暮らしのストレスや困難理解に役立つ本

これまで田舎暮らし，ムラ社会の仕組みについて参考になる文献を蒐集しているが，その中にとりわけ興味深い本が幾つかある。

まず取り上げたいのは堀越久甫『村の中で村を考える』（1979年）。

著者が東京で農業雑誌の編集をした後、フリーのものの書きになったが、昭和46年に生まれ故郷のムラに戻った。そこで生計を立てつつ、一方ではごく普通のムラビトとして生活し、ムラの現実に立つ一方、覚めた眼でムラを見つめる、という生き方をしようと志した。農業評論一筋に歩む著者が、郷里、長野の農村に帰り住んだ7年間の記録。農村と農民意識の変貌をムラの内側から分析、明日の農村を考える。

著者は戦後の30数年間、日本中の農村を訪ねて歩いた。農村地帯について知らないところはないといってもよい。ムラを内側からみたものがこの本の特色だが、それでいて、とても暖かな視線を感じられ、戦後から1970年代にかけてのムラの変貌ぶりと人々の意識の変化がよくわかる。

次は作家丸山健二『田舎暮らしに殺されない法』(2008年)。

23歳で芥川賞受賞した丸山さんが出身地長野に帰郷し、数十年にわたって文筆業で生計を立てつつ田舎暮らしをしている。団塊世代向けに書いたこの本はまさに歯に衣着せぬ筆致で、ムラ社会の特質を的確かつ辛辣に捉えている。ムラビトはじめ、移住者にとってもかなり耳の痛いことも多々あるだろうが、ちっとも誇張ではない。田舎暮らしの経験ある人にとっては、頷くことばかりのたいへん説得力ある本といえる。よくぞここまで言ってくれた!と感心させられると同時に、同じ悩みを共有する者にとってかえって元気の出る本でもある。その鋭い観察眼に脱帽せざるを得ないというのが正直な気持ち。

上記2人とも長野県出身者でありながら、いったん東京などで働き、のちに帰郷者として出身地にUターンした場合である。ムラに生まれ育った者でありつつ、冷静にムラの仕組みや人間関係を内側から見つめるそれぞれ違った独自の視点を持っている。

最後に農村経済学と農業水利の研究者玉城哲『むら社会と現代』(1978年)もぜひともお薦めの一冊。

農耕民、とりわけ稲作民にとって、農業用水の確保が何より大事だ。日本は水社会。おそらく、日本ほど河川、水路そして溜池の分布密度の高い地域を他に発見することは困難である。雨の降り方も異なる。いつも枯れることのない水の流れ、水面に恵まれているという点で、日本は「水社会」というにふさわ

しいはずである。

水源が豊かなはずの日本は同時に常に水不足の悩みをもつ。水へのひそやかな憧れ。ひそやかという表現には、繊細な感性を含めているが、同時に、日本人が水の強迫観念にとりつかれ、水をめぐる社会的緊張関係の呪縛から逃れることができなかつた社会でもあったということをいう。藩政期の新田開発と米経済の確立。渇水年の水争いの多発とムラ同士の対立。用水慣行は水の配分をめぐる地域間の対立を調整するルールの成立であった。人々は生活の中で水に親しみながら、同時に絶えず水への強迫観念を抱き続ける。水の確保は、ムラを中心とした集団によってしか実現できなかつたから、ムラ人は常に集団行動を取らざるを得なかつた。

「農村を理解するためだけにムラを観察し、ムラを論じているわけではない。むしろ私は、日本の近現代社会の総体を理解するにあたって、ムラは一種の原像をなしていると考えているのである。したがって、単なる農村社会学的な興味からムラを眺めるのではなく、大袈裟に言えば、日本の国家体制、経済制度、文化現象のすべてにかかわるものとして、言葉をかえていえば、私自身の存在にかかわるものとして、ムラをつかまえてみたいと考えているのである。」

同書のあとがきで、著者の熱い想いが綴られた述懐にはわたしも非常に共感をおぼえた。ムラを知ることは、日本社会そのものを知ることでもある。ムラの仕組み、人間関係、「ウチ」「ソト」を理解することは、そのまま日本社会の理解を深めることになる。時代とともに変わるものと変わらないものがあり、形を変えてはいるものの、よくよく見つめると本質は案外少しも変わっていない。ムラ研究の先学たちに、温故知新の想いで学ぶ必要があることを痛感している昨今である。

参考文献

- 塩見直紀と種まき大作戦編『半農半Xの種を播く』コモンズ 2007年
蕭紅燕「“ウチ”“ソト”の壁を超える新農人——知足的な暮らしは世界平和を紡ぐ——」
『新しき村』11月号 2015年
田中淳夫『田舎で起業!』平凡社新書 2004年
田中淳夫『田舎で暮らす!』平凡社新書 2006年

玉城哲『むら社会と現代』毎日新聞社 1978年

玉城哲『むらは現代に生かせるか』農文協 1979年

玉村豊男『田舎暮らしができる人, できない人』集英社新書 2007年

玉村豊男編『SINRA』特集「田園回帰の時代——田舎で暮らそう」復刊1号 2014
年9月

堀越久甫『村の中で村を考える』NHK ブックス 日本放送出版協会 1979年

丸山健二『田舎暮らしに殺されない法』朝日新聞出版 2008年

